

IV—50

盛岡市の現在と16年前の都市景観の評価の比較考察について

岩手大学 正員 安藤 昭
 岩手大学 正員 佐々木栄洋
 岩手大学大学院 学生員 ○吉田 憲一

1. 研究の背景と目的

城下町起源の都市、盛岡市は、東北新幹線や東北縦貫自動車道の開通の影響で都心部の景観は著しく変容している。

そこで本研究では、現在の盛岡市の景観写真の類型化と評価を行い、16年前の都市景観と比較考察することにより、盛岡市の都市景観特性の変遷と、その課題を探索しようとするものである。

2. 研究方法

2-1 実験方法

実験は、景観分類実験と景観評価実験に分かれる。分類実験では盛岡市の都市景観の写真99枚を被験者の前に広げ、似ていると思われる景観写真を、いくつかのグループに分類してもらう方法で行った。評価実験では99枚の写真を「好き～嫌い」の5段階で評価してもらう方法で行った。被験者は盛岡市在住20歳以上の男女とし、直接面接法で行った。実験期間は平成13年7月2日～8日である。

2-2 景観写真の選定基準及び解析方法

16年前の景観写真は、先行研究¹⁾により選定された約400枚の写真のうち、盛岡市の代表的な都市景観の状況及び特徴をよく表している景観写真90枚²⁾である。また、今回の実験で用いた写真は、16年前の景観写真を基に、現在の盛岡市のイメージをよく再現させることを考え選定した盛岡市を代表する都市景観と、近年16年で新たに創出された都市景観の合計99枚である。両者とも夏季の写真であり、現在の写真の撮影期間は平成13年5月1日～7月1日である。

分類実験の解析は類似マトリックス及びクラスター分析を用いた。評価実験の解析はShannonの情報理論と系列カテゴリ法を用いた。

2-3 景観分析モデル

景観分類の基準となる都市景観分析モデルは以下の構成からなる³⁾。

都市景観を人間（評価主体）と外界（都市）との間の視覚的・空間的・心理的な関係性として捉え、空間（景観）と心理現象としての景観（図-1）の2つの尺度を交差させると、都市景観の大略の構成が描きだせる（図-1）。

3. 解析結果及び考察

3-1 被験者の個人属性

被験者の個人属性を表-1に示す。また、男女及び在住年数の平均分類数の差の検定を行

表-1 被験者の個人属性

	盛岡在住20年以下	盛岡在住20年以上	合計
男性	50	50	100
女性	50	50	100
合計	100	100	200

表-2 男性と女性の平均分類数の差の検定

	人数	$\bar{x}$	σ^2	d.f.	2v
男性	100人	14.79	15.69		
女性	100人	15.16	15.05	0.36	1.43

い、表-2、表-3に示す。平均値

の分散に優位差があるといえないことから被験者の性別、在住年数の構成比は考えずにひとつにまとめた。

3-2 景観分類

クラスター分析の結果で樹形図を作り順次クラスター化させ、作業を止める基準は各景観パターンの意味付け、平均分類数を考慮し16分類とした。この結果より得られた景観パターンにネーミングを行い、16年前の分類評価結果²⁾とともに表-4に示す。表中の矢印はパターンを構成する景観写真の関連性があることを示す。さらに景観パターンは大きく「生物的環境」「インフラ機能空間」「文化現象としての景観」「心理現象としての景観」に分類される。

表-3 盛岡市在住年数による平均分類数の差の検定

	人数	$\bar{x}$	σ^2	d.f.	2v
在住20年未満	100人	15.19	14.77		
在住20年以上	100人	14.76	15.93	0.43	1.43

表-4 現在と16年前の景観パターン

景観パターン	枚数	評価値	順位	景観パターン	枚数	評価値	順位
生物的環境	7	0.193	5	都市俯瞰・田園景観	11	0.012	9
眺望・田園景観	7	0.166	5	岩手山を背景とする湖	1	0.278	1
岩手山を背景とする湖	6	0.248	1	岩手山を背景とする景観	8	0.278	1
水及び河川景観	6	0.209	2	都市近郊河川景観	8	0.149	4
都市近郊河川景観	4	0.125	8	橋梁景観及び都市河川景観	8	0.081	7
都市河川景観	4	0.125	8	橋梁景観	8	0.081	7
インフラ機能空間	13	-0.094	15	幹線道路・駅前広場	10	-0.185	12
幹線道路・駅前広場	13	-0.146	15	中高层建群	6	-0.251	14
中高层建群	5	-0.276	16	住宅地沿道	4	-0.183	13
住宅地沿道	7	-0.080	14	住宅地沿道	4	-0.183	13
橋梁景観 (1)	5	0.080	11	ハイパス・東北縦貫自動車道	2	-0.074	11
橋梁景観 (2)	2	0.183	4				
文化現象としての景観	12	0.065	12	教育・文化・レクリエーション施設景観	8	0.091	5
教育・文化・レクリエーション施設景観	12	-0.018	12	学校・大学景観	10	0.172	3
学校・大学景観	8	0.164	6	学校・大学景観	5	0.090	6
学校・大学景観	3	0.063	13	洋風建築景観	5	0.080	8
洋風建築景観	4	0.105	10	和風建築景観	3	-0.065	10
和風建築景観	3	0.134	7	教会景観	3	-0.065	10
歴史的街並み景観	2	0.202	3				
心理現象としての景観	12	0.107	9	彫刻	2	0.197	2
彫刻	12	0.107	9	彫刻	2	0.197	2

3-3 景観評価

各景観区分、各景観パターンの評価値を表-4内に示す。

生物的環境において、16年前の景観区分の評価値は0.119、現在は0.193と上がっている。区分内の関連性のある景観パターンの評価値について、16年前の都市俯瞰・田園景観は0.012、現在の眺望・田園景観は0.166と上がっている。さらに各景観写真の評価値から、岩山、愛宕山から市街地の俯瞰景観の評価値が上がっている。理由として、昭和59年策定の「盛岡市都市景観形成ガイドライン⁴⁾」（以下、ガイドライン）において岩山と愛宕山周辺は景観形成重点地区に指定され、遠望する山と市街の眺望を保全し、自然の改変を極力避けることが望ましく、ガイドラインに強制力はないが行政と市民が意識して眺望保全に取り組んだ効果の表れと考えられる。また16年前には岩手山を背景とする景観に分類された「小岩井農場から岩手山の眺望」が、現在では眺望・田園景観に分類されている。この景観写真の評価値が高いことから、パターンの評価値への影響が高いと考えられる。

また、16年前の岩手山を背景とする景観の評価値は0.278、現在の岩手山を背景とする湖水及び河川景観は0.248と高い値を示すが、現在の景観写真の評価値が全て16年前

に比べ若干低く、評価の上がった視対象はない。パターンには高松の池や四十四田ダム公園、市内を流れる北上川から岩手山の眺望が含まれ、ガイドラインで各々自然景観地、河川景観軸の景観形成重点地区に指定されているにも関わらず、評価値は下がっていることに注目したい。

次に都市近郊河川は、16年前の評価値は0.149、現在は0.209と上がっている。各景観写真の評価値は、「三馬橋から北上川」「太田橋から雫石川」「梁川の上流」で上がり、市街地に近い「梁川の下流」では著しく下がっている。これらはガイドラインで景観形成重点地区、景観形成地区に指定され、市街地から離れた場所では自然性を著しく阻害する人為をさけ、現存する自然景観を保持する効果があるが、梁川の下流では5分勾配の護岸からうける印象の悪さが、評価値の低さの原因の一つと考えられる。

また、16年前の橋梁及び都市河川景観の評価値は0.081、現在の都市河川景観は0.125と上がっているが、これは20年前のみに分類された橋梁景観の評価値の低さが影響するため、良くなったとはいえない。河川景観だけに着目すると、中津川沿いの富士見橋、中ノ橋から流域への景観評価、特に「中ノ橋から中津川」の評価値が大きく上がっており、中津川沿いの散策路に街路照明を取り付け、夜間のライトアップ等イメージアップを目的とした護岸の修景の効果がみられる。

次にインフラ機能空間において、16年前の景観区分の評価値は-0.185、現在は-0.094と上がっているが、依然として低い評価である。区分内の関連性のある景観パターンについて、16年前の幹線街路・繁華街は-0.169、現在のバイパス・幹線街路・繁華街は-0.146と微増している。各景観写真の評価値は、大通り・中央通り・材木町で20年前に比べ上がっているが、依然全ての幹線街路・繁華街の評価値は低い。評価の上がった地域は商業地域に属し、ガイドラインでは街路景観軸の景観形成地区、景観形成重点地区、町すじの景観形成地区に指定され、アーケードの改修や歩道拡張など快適な歩行空間確保を行っているが評価値が低い背景には、依然として都心部への自動車の流入量が多いことや、雑然と駐輪された自転車の多さなどの原因が考えられる。

次に中高層建築は、16年前の評価値が-0.251、現在は-0.276とやや下がっている。各景観写真の評価値は、「パレ菜園」や「小岩井中津川マンション」が大きく下がっている。これは昭和40年に岩手公園の北側に高層ビルが建ち、公園内から岩手山の眺望が阻害され、これを契機に市民の景観意識が高まったことに由来し、岩手山眺望領域での建築物高さ制限により領域内での高層建築物の立地は抑制されているが、近年の領域外での多数の立地により市民の景観への危機感がさらに強まったことの表れであると考えられる。

次に住宅地沿道は、16年前の評価値が-0.183、現在は-0.080と上がっている。しかし、現在のパターン内には平成4年に盛岡市に合併された都南地区の住宅地沿道が追加され、その評価値が既存の住宅地より多少高いため、評価が上がったと一概にはいえない。共通する各景観写真の評価値は、現在も16年前もさほど変わりはない。これらは第一種

低層住宅専用地域に属し、ガイドラインでは一般市街地であり、病院や大規模な店舗、娯楽施設等の立地に規制があるため、閑静な住宅地のまま大きな景観変化がなく、評価値の変化がないと考えられる。

次に、文化現象としての景観において、16年前の景観区分の評価値は0.101に対し、現在は0.065と下がっている。区分内の関連性のある景観パターンの評価値について、社寺・界隈景観は、16年前の評価値は0.172、現在は0.164とほぼ変化がない。視対象の多くが北山・山王の第一種住居地域に属し、広大な敷地を所有し寺町が形成され、消費者が集まりにくく小規模の店舗・飲食店などは立地可能だが進出しづらい。また、ガイドラインでは視対象の多くが歴史景観地の景観形成重要地区に指定され、歴史的積層がある地域ゆえに住民の住環境への意識が強く、歴史的雰囲気重視した景観作りに配慮しているため、新参が介入しにくい地域と考えられる。従って景観が変化しにくく、重厚な歴史的雰囲気が評価が高いまま保全されていると考えられる。

次に学校・大学景観は、16年前の評価値は0.090、現在は-0.063に下がっているが、16年前のパターンに高い評価値で分類された岩手大学旧本部が、現在では和風建築景観に分類されるため、学校・大学景観のパターンの評価が低くなったとはいえない。しかし、「盛岡第一高等学校」が校舎を改築し近代化したりと、学校の個性が失われる改修を行った結果、評価が下がる要素となったと考えられる。

次に洋風建築景観は、16年前の評価値は0.080、現在は0.105と微増している。ここに属する景観写真はガイドラインで景観形成重点地区に指定され、歴史的街路景観創出の基点となる。しかし、商業地域であり強制力のないガイドラインでは中心業務地区の拡大を抑制できず、視対象周辺には近代建物が増え、本来評価されるべき歴史的洋風建築の評価値がさほど高くない原因であると考えられる。

次に、心理現象としての景観において、16年前の評価値は0.197、現在は0.107と下がったが、ここに分類された景観写真の数が2枚から12枚と増えたため、一概に評価が下がったとはいえない。また、景観区分の評価値は、インフラ機能空間や文化現象としての景観と比べ高い値を示す。現在の各景観写真の評価値は、公園や自然の中の彫刻の評価値が最も高く、次に住居地域の彫刻が高く、中心市街地に近づくにつれ評価値が低くなり駅周辺にある彫刻で最低となる。これには街路や立地場所のイメージと、彫刻のデザインの意味の関連を強める必要性があると考えられる。

【参考文献】

- 1) 三上勉・森口勉：イメージ集束法による盛岡市の景観イメージの解析、岩手大学卒業論文、1981
- 1) 佐竹克也：東北新幹線開通後の盛岡の景観の分類と評価、岩手大学卒業論文、1985
- 2) 安藤昭・赤谷隆一：感覚統合理論による都市景観設計の体系化、土木学会論文集No. 653、2000. 7
- 3) 都市景観形成ガイドライン-盛岡らしい都市景観を目指して-盛岡市都市計画部、1995